

ことばだより

Vol.6

2022（令和4）年3月

連載

ことばと心を育てる ICT活用に

群馬大学 准教授
かわうちあきひろ
河内昭浩



1. 資質・能力の向上につながる ICT の活用 (1)

『ウミガメの命をつなぐ』（四下）での中心的な学習活動は、「要約」（「大事な言葉や文に気をつけて要約しよう」）です。「要約」とは、「文章や話の全体、または、一部を短くまとめること」で、中学年で身につけるべき「読むこと」の力です。「要約」をするには、「要点」をつかむ力が必要です。「要点」とは、「話や文章の大事な内容」です。ICTを離れて、子どもが「できない」背景に、「学ぶときに使う言葉」そのものを理解していないことがあります。教科書の巻末を授業に生かしてください。

この教材を扱ううえでまず重要なことは、3年次の『うめぼしのはたらき』『めだか』（三上）での要点把握の学習を想起させることです。要点をつかむための、「段落の中の中心となる言葉や文」を「見つける」活動、複数の要点を「つなぐ」活動を復習するとよいでしょう。

これらの学習活動には、「デジタル教科書」が便利です。「デジタル教科書」では、本文に自在に線を引く・消す・つなぐことができます。他のICTツールと組み合わせれば、他者の活動と共有し、見比べることで、自らの学習を調整することができます。またICTを活用すると、学びの記録を容易に保存することができます。

[資質・能力の向上につながる ICT 活用イメージ 1]

- ①線を引く・消す・つなぐ
- ②学習活動を共有し、調整する
- ③過去の学びの記録を生かす

2. 資質・能力の向上につながる ICT の活用 (2)

さて、いよいよ「要約」です。教科書の「てびき」にそば、「要約」は、(1) 興味をもった点をあげ、(2) 大事な言葉や文を書き出し、(3) 要約するといった学習過程です。これらの活動一つ一つは、ICTを使わなくても行えます。ただし少なくとも子どもが、「(2) と (3) の間」、構成を考えたり、考えをまとめたりする場面で、つまずきを感じるのではないのでしょうか。全く手がつかない子どもには、要約の例示が必要かもしれません。また、それぞれの子どもに応じたアドバイスが必要です。ICTは、そうした「個に応じた指導」に便利です。要約の例文を「資料」として格納すれば、見たい子どもが見たい時に見ることができます。コメント機能を使えば、一人一人へのアドバイスや添削が容易に行えます。

また、作成した要約を発表・交流する際にも、ICTは有効に機能します。ICTを活用して提出すれば、教室全員の要約文を、それぞれの子どもが自分のPC（タブレット）で閲覧できます。

[資質・能力の向上につながる ICT 活用イメージ 2]

- ④構成を考える・考えをまとめる
- ⑤個に対応する（資料の格納・アドバイス）
- ⑥教室全員で発表する・交流する

3. ことばと心を育てる ICT活用に

ICTは便利な道具ですが、危うい面があるのもご承知のとおりです。国語で、ICTを通してことばを育てる。そして、ことばを通して豊かな心を育てる。そして、豊かな心をもってICTを適切に用いる。そんな循環になればと考えています。



1

アイスブレイク教材で 国語の授業開きを行う

令和2年度から教育出版の教科書には、アイスブレイク教材が各学年の冒頭に位置づけられることになりました。この教材を扱うことによって国語の授業開きが行われることとなりますが、そこにどのような意味をもたせることができるでしょうか。

まず考えられるのは、リラックスした雰囲気作りです。アイスブレイクとは「緊張を解きコミュニケーションができるようにする技法」であるといえます。初対面の人と関わる時にはどうしても緊張の気持ちが伴うものです。緊張してしまうのは、自分が対峙している相手のことがよくわからないからです。新年度。お互いが何も知らない状態。どんな人がどのくらい教室にいるのか、お互いがお互いのことを探り合っている状態。あるいはたとえ持ち上がりで見知った間柄であったとしても、新しい教室というのは子どもたちの人間関係に微妙な変化を与えるものです。子どもたちの「わからない」ことへの不安を少しでも和らげることを目的として設定されたのがアイスブレイク教材ということになります。

そして、国語の授業に対する学習者の構え作りという観点からも、アイスブレイク教材を扱うことには大きな意味があります。「何事も最初が肝心」とはよくいわれることですが、国語の授業においてもまず新年度の初めに行われることがその後続く授業の基調を定めることとなります。国語の授業は、一方的に先生の話聞く時間ではなく、自分たち自身の能動的で対話的な活動によって展開されるものであるということを学習者に意識づけるといった観点からも、こうした活動を年度当初に行うことはとても重要です。

ただしこうした活動は、往々にしてただ単に楽しいだけの活動で終わってしまうことになりがちです。そのようなことにならないための工夫について、ここでは四上に掲載されている『わたしは、だあれ』を取り上げて話を進めていきます。



2

『わたしは、だあれ』の教材的価値

四上『わたしは、だあれ』は、カードに書かれた内容をあてっこすることを目的として、友達と楽しく質問したりヒントを出し合ったりする言語活動です。活動の流れをまとめると次のようになります。

【『わたしは、だあれ』の学習活動】

1. 物の名前をカードに書く。
2. グループでカードをこうかんする。
3. カードをたしかめ、二人で組みになり、相手に見えないようにわたす。
4. カードに書かれた物についてヒントを出し、それをもとに質問し合い相手にあててもらう。

ヒントを出す側は、相手にカードの内容をわかってももらうためにどのようなヒントを出せばよいのか思いをめぐらせます。カードの内容をあてる側もまた、相手の意図を探りながら正解にたどり着くために質問を行わなければなりません。自分の考えていることをわかってもらうためには、わかってもらう相手のことに思いを馳せる必要があります。お互いに質問しヒントを出すことを通して、そうしたことに気づかせていくことがねらいとなっています。

言葉の力を高めていくためには、人との関わり（やりとり）がとても大切です。「伝え合う力」を育てることが学習指導要領にも明記されていますが、結果としてそうした力を育成することを旨とするのではなく、伝え合うという活動そのもののなかに、活動を豊かにするための契機が存在するということが気づかせる学習活動です。



3

人間関係を広げ深めるための 指導上の工夫

以上を踏まえつつ、この活動を更に豊かにするためにはどうすべきか。その指導上の工夫のポイントを幾つか

あげておきます。

(1) ペア活動からグループ活動への円滑な移行

教科書に示されている活動は、基本的にはペアになって行う一対一の活動となっていますが、教室全体の雰囲気作りを視野に入れるのであれば、多くの子どもたちが一緒になって楽しめる一対多の活動に発展させるということを考えてもよいでしょう。

例えば「1. 物の名前をカードに書く。」段階において、学習者それぞれが頭の中に思い浮かべたものではなく、「私の好きなもの」などに限定するなどということが考えられます。そうすることで、ペアでのやりとりをグループの仲間が見守ろうとする雰囲気が自然と生み出され、カードの内容が明らかになったあとには、カードを実際に書いた子どもに好きな理由や愛着を語ってもらう機会を作り出すことができます。

(2) 自己開示の促進

コミュニケーションの基本は「自己開示」であるといわれます。まずは自分を知ってもらうことが相手との距離を縮める近道となります。それを踏まえるならば「4. カードに書かれた物についてヒントを出し、相手にあててもらう。」という段階において、そのヒントの出し方に工夫を凝らすことができます。一般的に、ヒントはその対象の客観的な事実や状態の説明に基づいて出されますが、そこにあえて個人的な関わりや主観的な意見（考え）を含んだものを織り交ぜるといったやり方です。

【例】「みかん」のヒント

◇ 普通のヒント（客観的なヒント）

- 色はオレンジ
- 味は甘酸っぱい
- 外の皮をむいて食べる など

◇ 自分ならではのヒント（主観的なヒント）

- 毎年田舎のおじいちゃんが送ってくれる
- 食べると明るい気持ちになる
- こたつに入って食べるのが好き など

自分の思いをベースにした主観的なヒントを考えさせるということは、自分の率直な思いを素直に伝えていいんだという気持ちの構えを作ることにもつながります。

また教科書の活動は、他の人が考えたカードの内容をあてるという活動ですが、より「自分」を知ってもらうということに力点を置けば、カードの内容を自分のこととしてそれを友達にあててもらおうという活動に転換することも当然考えられます。「今年の目標」「最近失敗

してしまったこと」などをテーマにして、それをみんなにあててもらおうという活動です。

【例】私は昨日、登校中にある失敗をしてしまいました。それは何でしょうか？

→ それは持ち物に関係がありますか？

→ その失敗のせいで人に迷惑をかけたか？

など



4 まとめ

全体的な留意点として、こうした活動に対して指示や手順を詳細に示しすぎることは、子どもたちに受動的な態度を強いてしまうおそれがあります。子どもたちを指示待ちにしないために、ほどよい活動指示を出して温かなまなざしで見守ってあげたいものです。

顔の見えない非接触型のやりとりが多くなっています。「いつでもどこでも誰とでも」簡単につながることできる時代。とても便利になりましたが、言葉の背後にいる他者を意識することが難しくなったのも事実です。他者を知ることの喜び・楽しさを実感させること。そのために直接的な対面でのやりとりを行うことはとても重要です。

言葉を大切にするということは人を大切にすることにつながります。思っているだけでは伝わらない、身ぶり手ぶりや表情などといった外面的な行動のみでもうまく伝わらない、かといって言葉だけ一人歩きさせるということもしない。心と身体と言葉を一体化させることの重要性を学ぶことができるのは、直接的で対面的なやりとりを通してのみなのです。

アイスブレイク教材を用いて、和気あいあいとした雰囲気、国語の授業をスタートさせましょう。



指導者用デジタル教科書（教材）をアップデート！

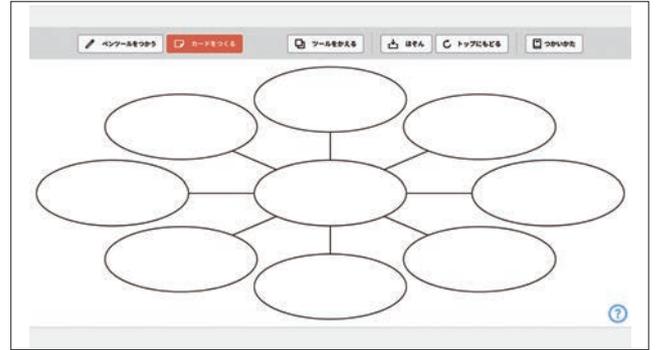
授業でご活用いただけるよう、コンテンツを更に充実してご提供いたします。

※クラウド配信版は自動的にアップデートされ、それ以外は年次更新作業をしていただくとアップデートされます。



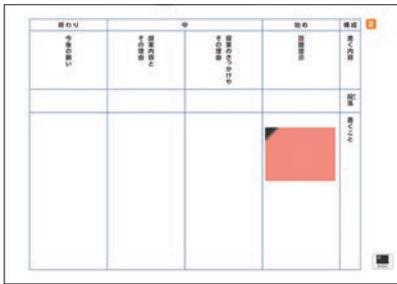
▲ デジタルメモ

教科書紙面を確認しながら自分の考えなどをメモすることができます。



▲ 思考ツール

意見や考えを可視化して、深い学びをサポートします。



◀ ワークシート

書くこと教材には、文章の構成を考えることができる組み立て表を用意しています。

● デジタル教科書の年次更新に関するご案内 ●

デジタル教科書（ビューア及びコンテンツ）の令和4年度対応年次更新データダウンロードページをご案内いたします。弊社ウェブサイトよりご確認くださいませようお願い申し上げます。

https://d-support.kyoiku-shuppan.co.jp/sho_update



新発売！ 学習者用デジタル教科書＋デジタル教材



▲ 横書き

読むこと教材に横書き紙面を用意しました。自分で縦書きか横書きか読みやすいほうを選ぶことができます。



▲ 辞書

紙の辞書を意識した学習者用独自のレイアウトです。



サンプル版は、下記ページからご覧ください。
<https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/2020shou/digital/index.html>



本誌のデザイン

『小学国語通信 ことばだより』では、デザインに季節ごとの「かさねの色目」（平安時代以降の服飾文化に用いられた色彩）をイメージした配色を用いています。今回の号では、春のかさねの色目の中から、早春に花開く紅梅の色を模した「紅梅」を選びました。ぜひ次号のデザインもご覧くださいませと幸いに存じます。

※「かさねの色目」の組み合わせには、諸説あります。

小学国語通信 ことばだより Vol.6 2022（令和4）年3月発行

教育出版株式会社 編集部 国語科

〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFT ビル西館

TEL：03-5579-6278（代表）